

<論 説>

『資本論』と資本制*

川 村 哲 也

目 次

はじめに

1. 『資本論』の方法／基本視座
2. 資本制のポジティブな側面
3. 資本制のネガティブな側面
4. 資本制の下での労働過程
5. おわりに

はじめに

よく知られているように『資本論』は、19世紀中葉のイギリス資本制を対象として、その現実の発展過程を分析すると同時に、当時の最先端の経済理論であるイギリス古典派経済学のさまざまな著作を批判的に摂取することで、資本制というシステムのメカニズムを理論化した書物である。

だが当然のことながら、現代の資本制は当時の資本制から大きく変容している。そしてそのことが『資本論』の現代的な意義を宣揚することを難しくしている。他方、『資本論』あるいはマルクスが、資本制というシステムをもっとも根底的に考察し、その意義と限界をさまざまな角度から見極めようとしたということもまた事実であるように思われる。

『資本論』は、経済理論の書であると同時に歴史理論の書でもあり、さらにそのサブタイトルが示すように「経済学批判」の書でもある。これらの側面が一体となって『資本論』という作品は構築されている。本ノートの実質的な目的は、射程をやや大きくとって、マルクスの主著『資本論』、その特に第1巻を対象として、その資本制についての認識を改めて整理してみようということにある。そのことによって、マルクスが資本制というシステムのどういった点を積極的に評価したもののような点を批判したのか、ということをも明らかにするための一助としたい。

1. 『資本論』の方法／基本視座

先に述べたように、『資本論』はその副題として「経済学批判」を有している。マルクスにとって「批判」の意味するところは、資本制という経済システムを永遠の相対で眺めそれを理論化

した古典派経済学に対する批判と同時に、資本制という経済システムそのものに対する批判、これら両者を併せもっていたということが出来る。だが『資本論』における資本制への眼差しはこの点にとどまらない。

すでに何度となく引用されている文言であるが、マルクスは『資本論』第二版へのあとがきにおいて、自らの駆使する方法を弁証法と呼び、次のように記している。

「……この弁証法は、現存するものの肯定的理解のうちに、同時にまた、その否定、その必然的没落の理解を含み、どの生成した形態をも運動の流れのなかで、したがってまたその経過的な側面からとらえ、なにものによっても威圧されることなく、その本質上批判的であり革命的である……」¹。

ここで述べられているように、マルクスにとって現存するものを理解するためには、その「肯定的理解」と同時に「否定」的理解をも含むものでなければならないしまた流れの中で理解しなければならない。いうまでもなく『資本論』は、資本制をその分析の対象としている。したがって資本制に対する認識についてもこれら両者が存在するはずである。

『資本論』あるいはマルクス主義は資本制に対する容赦ない批判をその真骨頂としてきたといえる。他方で、資本制についての「肯定的理解」についてはそれほど言及されてきたとはいえないし、また肯定的側面の『資本論』における位置づけもそれほど明確になっているとはいえない²。そこでわれわれは、資本制のポジティブな側面とネガティブな側面を対応させて考察し、『資本論』の特徴を浮かび上がらせたいと考える。

さて、『資本論』における資本制分析の基本視座についてであるが、これについてはさまざまな見解がありうる。われわれはそれを労働（過程）と考える。マルクスによれば労働とは、次のように定義される。

「労働は、まず第一に、人間と自然との間の一過程、すなわち人間が自然とその物質代謝を彼自身の行為によって媒介し、規制し、管理する一過程である。……人間は、この運動によって、自分の外部の自然に働きかけて、それを変化させることにより、同時に自分自身の自然を変化させる。……労働過程の終わりには、そのはじめに労働者の表象のなかにすでに現存していた、したがって観念的にすでに現存していた結果が出てくる」³。

『資本論』では、このような歴史貫通的な労働過程が、資本のもとで行われることによって被る変容を第4篇「相対的剰余価値の生産」において執拗に追求している。そこでは資本制の階級対立が現われると同時に、資本制的労働過程の発展、生産様式そのものの変化に伴って、未来社会への展望が現われてくるような叙述となっている。われわれはこうした側面に着目し、社会の

発展と資本制の発展との関係について考察を加えることにしたい。

2. 資本制のポジティブな側面

資本制への積極的な評価は以下のものに限られるわけではない。ここでは本稿の議論にとって必要だと思われるものについて整理しておくことにする。

マルクスは『資本論』第1巻第2篇において、労働力商品が売買される商品流通・商品交換の部面について、次のように述べている。

「労働力の売買がその枠内で行われる流通または商品交換の部面は、実際、天賦人権の真の楽園であった。ここで支配しているのは、自由、平等、所有、ベンサムだけである。……彼らを結びつけて一つの関係のなかに置く唯一の力は、彼らの自己利益、彼らの特別の利得、彼らの私益という力だけである」⁴。

いうまでもなくこうした側面は、「自由」な労働者が存在するための条件である。資本制は、労働力が商品化した社会として特徴づけることができるが、そのためには「自由な人格として自分の労働力を自分の商品として自由に処分する」⁵ことが可能になっていなければならない。

マルクスは『経済学批判要綱』において人類史を人格的依存関係から物象的依存関係へとという形で整理した。すなわち、さまざまな身分や特権という人格的依存関係による人間関係が市民革命によって廃止されるとともに、市場における個人の自由、法の下での平等を実現して資本制が成立する。

そして資本制においては物象的依存関係＝貨幣による人間関係が創出されることになる。ここでは、「商品交換自身の本性から生じる依存関係以外には、いかなる依存関係も含んではいない」⁶。もちろんいうまでもなく、マルクスは市場における「自由」や「平等」のみから資本制についての判断を下すことを厳に戒めている。資本制における自由とは、例えば市場における価格変動に翻弄されることを伴いながらの所有物を自由意思で譲渡しようという「自由」であるし、また平等も市場における交換の主体として「平等」の関連をもつというにすぎない⁷。しかし、資本制が形式的であれ自由・平等を達成したことはポジティブに評価していると考えることができる。

資本制は、個々の資本家による貨幣獲得競争、具体的には特別剰余価値の獲得競争を通じて、社会的生産力を発展させる。いうまでもなく個々の資本は利潤の最大化を追求して生産活動を行う。そのために資本は絶えざる技術革新を行い、生産する商品の価値を低下させることによって特別剰余価値を獲得しようと努める。こうして資本制のもとにおいては個々の資本家の競争により生産力は発展していくことになる。

「社会的労働の生産諸力の発展は、資本の歴史的任務であり、歴史的な存在理由である。まさにそれによって、資本は無意識のうちにより高度な生産形態の物質的条件をつくり出す」⁸。

マルクスによれば、資本の歴史的使命とは生産力を発展させることによって新しい社会の物質的条件をつくり出すことなのである。こうして、マルクスは資本制の「革命的役割」としての生産力の発展を未来社会との関係において積極的に評価するのである。

さらにこのように発展した生産力を梃子にして資本は世界市場を創出する。

「相対的剰余価値の生産、すなわち生産諸力の増大と発展にもとづく剰余価値生産は、新たな消費の生産を必要とする。すなわち、(……)消費圏域が流通の内部で拡大されることを必要とするのである。ここから資本の偉大な文明化作用が生じ、資本による一つの社会段階の生産が生じる」⁹

「世界市場を創りだそうとする傾向は、直接に、資本そのものの概念のうちに与えられている」¹⁰

資本は生産力の発展に伴って生産および消費の圏域を拡大し、それによって旧来の生産関係を破壊して資本制的生産関係を拓けていく。そしてこのことにより世界が物象的依存関係＝貨幣に一元化されることになる。いわゆる「資本の文明化作用」¹¹である。この「資本の文明化作用」についてはさまざまな議論があるが、物象的依存関係＝貨幣による人間関係の創出という先の論点と絡めて考えれば、マルクスはこれを歴史の発展と考えていたとみなすことができるだろう¹²。

さて以上の点を確認し、次にマルクスによる資本制批判の視座を整理する。

3. 資本制のネガティブな側面

マルクスがあるいは『資本論』が資本制に対して批判的だということは、常識に属している。だがその矛先がどこに向かっているのかという点では必ずしもコンセンサスが得られているわけではない¹³。ここではわれわれなりの視角から再構成しておく。

マルクスは、市場における諸個人の在り方—「自由・平等・所有・ベンサム」—を市民革命したがって資本制の達成した成果として積極的に評価する。だが、資本制のそうしたイデオロギーの欺瞞性を剔抉する。それは、「社会的観点」からなされる。市場において諸個人は、自らの意志にもとづいて自由にその所有物を交換する。そこでは取引当事者の合意によって契約が結ばれる。資本家は貨幣を、労働者は自らの労働力を所有物として交換する。もちろんこのことによって両者は互いに欲するものを手にするわけだから、互いに利益となっている。しかし、こうした対等な個人の契約は仮象にすぎない、とマルクスはいうのである。すなわち、「賃労働者の独立という外観は、個々の雇い主が絶えず入れ替わることによって、また契約という“法的擬制”に

よって維持される」¹⁴というのである。こうした点は、市場から生産あるいは資本蓄積の部に視点を変更することによって明らかになる。すなわち

「事実上、労働者は、自分を資本家に売るまえに、すでに資本に属している。彼の経済的隷属は、彼自身の販売の周期的更新や、彼の個人的雇い主の交替や、労働〔力〕の市場の価格の変動によって、媒介されると同時におい隠されている」¹⁵。

いかに対等な個人同士の合意にもとづく契約であろうとも、階級という視角から眺めてみれば、労働者は労働力を販売することによって貨幣を獲得しなければ生きていくことができないのだから、それは本質的に「強制」である、というのがマルクスの基本認識である。

市場においては、諸個人はただ交換者としてのみ規定される。こうした形態規定性のもとにあっては彼らのあいだにはなんの区別も存在せず、そこでの諸個人の関連は平等の関連である。だが「ブルジョア社会の全体のなかでは、諸価格としてのこうした措定や諸価格の流通などは、表面的な過程として現われ、その深部においてはまったく別の諸過程が進行し、そこでは諸個人のこのような仮象的な平等と自由は消失する」¹⁶。市場＝表面における諸個人の自由や平等は形式的なものにすぎず、生産＝深部においては不自由と不平等が支配的である、というのである。こうして、資本制における自由や平等という観念の欺瞞性が指摘されるのである。

一般に、こうした形式的な自由・平等と実質的な不自由・不平等という問題は、資本制的労働過程における支配・従属との関連で言及されることが多い。つまり、労働者は労働過程において資本家の支配の下に置かれている、というわけである。しかし、マルクスの経済学において諸人格が問題とされるのは、彼らが経済的諸カテゴリーの人格化であり、階級諸関係や利害関係の担い手である限りにおいてである。個人は社会的には諸関係の被造物なのである¹⁷。こうしたマルクスの視角からすれば、資本家という人格も決して資本制的労働過程において自由な存在ではない。

先にみたように、資本制は以前の生産様式に比較して飛躍的に生産力を発展させる。それは、利潤の最大化を目指す個々の資本の特別剰余価値獲得競争によるものであった。ここで問題となるのは競争である。資本制の生産は、生産の無政府性によって特徴づけられる。すなわち資本は、個々の利害関心のみにもとづいて生産を自由に行う。しかし、このようにして供給された諸商品が、社会的な需要に合致するかどうかはわからない。供給と需要との不一致は、事後的に修正されざるをえない。こうした修正が、いわゆる価値法則によって行われるということが資本制の特徴であるが、価値法則は競争によって個々の資本家に外的「強制」として押し付けられることになる。マルクスは「競争の権威すなわち彼らの相互利害の圧迫が彼らにおよぼす強制」¹⁸という言い方をしているが、資本家も個々の資本間の競争に勝利しなければ没落することは避けられず、競争という外的強制に従わざるをえない。こうして資本家も競争という権威に翻弄される

ことになるのである。

「人間は、宗教において自分自身の頭脳の産物によって支配されるのと同じように、資本主義的生産においては、自分自身の手の産物によって支配される」¹⁹。

さて、資本制は生産力を飛躍的に発展させるが、それは労働者の犠牲のもとで達成される。ジョン・スチュアート・ミルの機械が労働者の労苦を軽減したかどうかは疑わしいという『経済学原理』での記述を受け、「そのようなことは資本主義的にしようされる機械設備の目的ではない」と述べる。

こうした点についての『資本論』の記述は枚挙にいとまがない。機械設備の資本主義的使用は労働強度の増加をもたらす。さらに「不変資本の使用における節約」においては利潤の増大のために労働者の生命や安全を無視した機械設備や工場が作られていることが述べられている。

さらに生産力の発展とはすなわち資本の有機的構成の高度化であるから、それは相対的過剰人口という失業者を生み出す。資本の有機的構成の高度化は利潤論のレベルでは利潤率の下落として現われ、「資本主義的生産の刺激であり蓄積の条件および推進者である利潤率が、生産そのものの発展によっておびやかされる」²⁰。総じて

「資本主義制度の内部では労働の社会的生産力を高めるいっさいの方法は、個々の労働者の犠牲として行われるのであり、生産を進展させるいっさいの手段は、生産者の支配と搾取との手段に転化し、労働者を部分人間へと不具化させ、労働者を機械の付属物へとおとしめ、彼の労働苦で労働内容を破壊し、科学が自立的力能として労働過程に合体される程度に応じて、労働過程の精神的力能を労働者に疎遠なものにする」²¹

のである。

また、資本の文明化作用とは、資本の本源的蓄積の世界規模での再現であり、この本源的蓄積に対するマルクスの批判的舌鋒は鋭い。

以上簡単にみてきたように、マルクスによる資本制の評価は、肯定的理解と否定的理解とが一對一で対応している。資本制が達成した市場における「自由」「平等」に対しては階級という視点を対置し、その欺瞞性が指摘される。また、資本制の革命的役割は生産力を発展させ、未来社会への物質的基礎を創り出すことであるが、それが労働者の犠牲を伴ってのみ達成されることがいわれる。さらに世界市場の創出による物象的依存関係＝貨幣による人間関係の世界化は、本源的蓄積の世界規模での再現にすぎないとされるのである。

つぎにわれわれは、歴史貫通的な労働が資本制のもとでどのように行われるのか、そしてそれ

がどのように変容していくのかを追跡し、資本制的労働過程の発展と社会発展との関係を考察することとする。

4. 資本制の下での労働過程

『資本論』第1巻の中心部分は、第3篇から第5篇における剰余価値の生成を論じた部分である。そこではまず第3篇で、剰余価値の生成の基本的なメカニズムを明らかにしたうえで、労働日の延長による剰余価値の生産が絶対的剰余価値の生産として論じられる。第4篇は相対的剰余価値の生産と題され、「協業」「分業とマニファクチュア」「機械設備と大工業」の三つの章から構成されている。ここでは、独自の資本制的生産様式である機械制大工業を念頭におきながら、その構成要素を単純なものから複雑なものへ、すなわち資本制的生産様式の基本形態である協業から出発して、「労働が資本のもとに従属することによって生じる生産様式そのものの転化」²²に即して再構成されていると考えることができる。

われわれはこれらに諸章を貫くビジョンを、肉体労働と精神労働の分離、熟練の解体と資本の権力の完成、および労働過程における主客の転倒に見いだす²³。やや長くなるが引用しておく。

「機械労働は神経系統を極度に疲れさせるが、他方では、それは筋肉の多面的な働きを抑圧し、いっさいの自由な肉体的および精神的活動を奪い去る。労働の軽減さえも責め苦の手段となる。というのは、機械は労働者を労働から解放するのではなく、彼の労働を内容から解放するからである。労働過程であるだけでなく、同時に価値増殖過程でもある限り、すべての資本主義的生産にとっては、労働者が労働条件を使用するのではなく、逆に、労働条件が労働者を使用するということが共通しているが、しかしこの転倒は、機械とともに始めて技術的な一目瞭然の現実性をもつものになる。……生産過程の精神的諸力能が手の労働から分離すること、およびこれらの力能が労働にたいする資本の権力に転化することは、……機械を基礎として構築された大工業において完成される。内容を抜き取られた個別的機械労働者の細目的熟練は、機械体系のなかに体化しこの体系とともに「雇い主」の権力を形成している科学や巨大な自然諸力や社会的集団労働の前では、取るに足りない些細事として消えさせる」²⁴。

こうして資本制的労働過程の発展につれて「工場全体への、すなわち資本家への、労働者のどうしようもない従属が完成される」²⁵ということになるわけであるが、マルクスはこの引用部分に続けて次のように述べている。

「いつものように、この場合にも、社会的生産過程の発展による生産性の増大と、社会的生産過程の資本主義的利用による生産性の増大とを、区別しなければならない」²⁶。

すなわち、マルクスは上でみたビジョンと同時に「社会的生産過程の発展」を見ているのである。そしてこの「発展」の先には未来社会が見据えられているのである。次にこの論理を簡単に追跡してみよう。

まず、資本制的生産の出発点は協業である。協業とは「同じ生産過程において、あるいは異なっているが関連している生産諸過程において、肩をならべ一緒にになって計画的に労働する多くの人々の労働の形態」²⁷であるが、このことが「個別的な独立労働者たちや小親方たちの生産過程と対立」して「労働過程を社会的過程へと転化させ」「労働過程の生産力を増大させ」²⁸る。そしてこの協業において「労働者は他の労働者たちとの計画的協力のなかで、彼の個人的諸制限を脱して、彼の類的能力を発展させる」²⁹。

こうして側面は、独自の資本主義的生産様式である機械制大工業においても貫かれている。すなわち大工業においては

「変転する労働需要のための人間の絶対的な使用可能性をもってくることを、……さまざまな社会的機能をかわるがわる行うような活動様式をもった、全体的に発達した個人をもってくることを死活の問題とする」³⁰

ようになるのである。

資本制はまず労働過程を社会的過程とし、生産の社会化を進展させることで労働の生産力を増大させる。「結合労働日の独特な生産力は、労働の社会的生産力または社会的労働の生産力である。それは、協業そのものから生じる」³¹。さらに、大工業における協業そのものが労働者階級の人間的発達を要求するようになる。このようにして、資本制的労働過程の発展は、生産力の増大と「全体的に発達した個人」をもたらすことで、未来社会への物質的基礎およびそれを担うべき人間をおのずと生み出すのである。

もちろんこの過程は、摩擦なしに進むわけではない。資本制のもとでは労働の社会的生産力あるいは社会的労働の生産力は資本の生産力として現象する。また、増大した生産力は、必要労働時間を減少させるが残りの時間は自由時間とはならずに残余労働時間として資本に領有される³²。

すなわち資本制は社会の発展をもたらす、それが未来社会およびそれを担うべき人間を生みだすけれども、資本制のもとではそれとは矛盾するように現象するということである。

5. おわりに

ここまでわれわれは、『資本論』における資本制認識についていくつかの諸点をピックアップし整理してきた。最後に以上の議論をまとめて本ノートを閉じることにする。第一に、『資本論』においてマルクスは資本制的生産様式のポジティブな側面とネガティブな側面の両者に配視

している。その際、そのポジティブな側面は資本制が達成した積極的な成果として評価している。

第二に、資本制の役割は、生産力を飛躍的に増大させることである。マルクスの歴史認識によれば、ある社会はそれが発展しきってしまうまでは決して没落することはない。

社会の生産力が発展し、その生産関係が桎梏となるまでは新たな生産関係は生じない。可能性がすべて実現してしまうまでは次の社会は生まれでない。資本は、生産力を発展させることでその未来社会の物質的基盤を創出するのである。その際、生産力を発達させるための労働過程の変容（機械制大工業）が未来社会を担うべき全面的に発達した個人を生み出す。

第三に、社会の発展とその資本制の下での現われを区別している。社会の発展は、資本制のもとで摩擦を生じさせながら進展する。

注

* 本稿は、拙稿「資本制のポジとネガ」『情況』2009年6月号を基にしており、これと重なる部分が多いことをお断りしておく。

- 1 Karl Marx, *Das Kapital*, Bd. 1, *Marx Engels Werke (MEW)*, Bd. 23, Dietz Verlag, 1962, S. 28.
- 2 松尾匡『近代の復権—マルクスの近代観から見た現代資本主義とアソシエーション—』, 晃洋書房, 2001年には、近代あるいは資本制の発展に歴史の進歩を見たのがマルクスであり、マルクスはその積極的な面を引き継ぐことを主張したのだ、との指摘がある。参照されたい。
- 3 *ibid.*, S. 192.
- 4 *ibid.*, S. 190.
- 5 *ibid.*, S. 183.
- 6 *ibid.*, S. 182.
- 7 Marx, *Ökonomische Manuskripte 1857/58, Marx Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, II/1.2, Dietz Verlag, 1981, SS. 165–7.
- 8 Marx, *Das Kapital*, Bd. 3, *MEW*, Bd. 25, 1969, S. 269.
- 9 Marx, *Ökonomische Manuskripte 1857/58, op. cit.*, S. 322.
- 10 *ibid.*, S. 320.
- 11 *ibid.*, S. 322.
- 12 松尾, 前掲書, 26頁参照。
松尾によれば、近代（=資本制）社会は、前近代社会とは異なって人間の力によって生産可能な機械をその基礎とし、また前近代を特徴づける人格的な支配・従属関係や特権などを破壊する。そしてそのことによって貨幣によってのみ動かされる社会関係を創り出し、全世界を世界経済の網の目の中に組み入れる。そしてこれは、すべての個人が単一の普遍的原理のもとに服すことであり、マルクスはこれを近代の持つ肯定的側面とみなしている。
- 13 これまでみられた資本制批判の議論については、青木孝平『コミュニタリアニズムへ 家族・私的所有・国家の社会哲学』, 社会評論社, 2002年。同『コミュニタリアン・マルクス』, 社会評論社, 2008年, を参照。青木は、これまでに見られた資本制批判のスタンスを、大きく「歴史理論による批判」と「正義理論による批判」（これには、搾取論および支配・従属論も含まれる）という二つの傾向に整理したうえで、そのどちらも成功していないと主張している。そして自らは、マルクス=宇野弘蔵にコミュニタリアニズムを読み込む。

- 14 Marx, *Das Kapital*, Bd. 1, *op. cit.*, S. 599.
- 15 *ibid.*, S. 603.
- 16 Marx, *Ökonomische Manuskripte 1857/58*, *MEGA*, II/1.1, 1976, S. 171.
- 17 Marx, *Das Kapital*, Bd. 1, *op. cit.*, S. 16.
- 18 *ibid.*, S. 377.
- 19 *ibid.*, S. 649.
- 20 Marx, *Das Kapital*, Bd. 3, *op. cit.*, S. 270.
- 21 *ibid.*, S. 674.
- 22 Marx, *Das Kapital*, Bd. 1, *op. cit.*, S. 199.
- 23 松尾匡「未来社会創造の条件としての普遍的人間の条件」基礎経済科学研究所編『未来社会を展望する』, 大月書店, 2010年, 所収, においては, 第11章から第13章への展開を普遍化に向かったのポジネガーポジとして整理している。参照されたい。
- 24 *ibid.*, S. 446.
- 25 *ibid.*, S. 445.
- 26 *ibid.*
- 27 *ibid.*, S. 344.
- 28 *ibid.*, S. 354.
- 29 *ibid.*, S. 349.
- 30 *ibid.*, S. 511.
- 31 *ibid.*
- 32 「労働日の短縮が根本条件である」(Karl Marx, *Das Kapital*, Bd. 3, *op. cit.*, S. 828.)。